

芸術と教育

——地域開発と文化——

片岡俊郎

はじめに

私は、地域開発を論ずるにあたり、産業基盤、生活環境基盤、保健・福祉・医療基盤、教育文化基盤、行財政基盤、広域基盤の重要性を指摘してきた。本稿は、教育文化基盤を扱ったものである。

私はまた、前記6基盤に、文明論的視点を重ねて展開する手法を駆使してきた。文明論的視点とは、文明を、政治、経済、（軍事）、技術、文化と整理し、文化を精神文化と理解し、学術、芸術、宗教、教育、出版等と考え、文化に裏付けられた政治、経済、（軍事）、技術を解明することであるとしてきた。本稿は、学術、芸術、教育を中心に、地域開発を論じたものである。

私は、経済学を人間関係処理論と定義し、先学の経済学者、J.M.ケインズが最終的に目指した人間学としての経済学（モラルエコノミクス）を引き継ぎ、完成させることを一つの目標としている。本稿においては、学術、芸術、教育を中心に据えた。それ故に、ケインズが回想録「若き日の信条」（My Early Beliefs,1938）であげた経済学研究者としての必要な条件、真理（truth）、美（beauty）、愛（love）を、学術、芸術、教育と結びつけて検討したものである。

私は、地域開発論を研究するに際し、私の所属する福山大学が広島県福山市に位置する故に、福山市を中心に、広島県東部地域に絞り込んできた。広島県東部地域は、備後三市といわれる福山、尾道、三原が核になって構成されている。

本稿での広島県東部との関係は、文化のうち、学術・教育については、福

山市に存在する福山大学に目を向けた。芸術については、広島県三原市出身の映画監督、田坂具隆にちなみ、映像芸術である映画を分析し、次に、イタリアを中心とする近・現代ヨーロッパ美術（絵画・彫刻）を収蔵するふくやま美術館と結びつけ、イタリア音楽の中で、イタリアの作曲家、レスピーギを取り上げ、さらに、私は福山市民であり、福山大学に在職している個人的理由をも考慮して、私が大学入学以来、50年近く関心を持ち続けている赤穂事件を扱った演劇「冬の絵空」を問題にした。

福山大学では、牟田泰三学長と宮地尚総長・理事長の告辞、挨拶での、芸術と教育、文明と教育への言及に注目した。映画監督、田坂具隆に関しては、取り上げた田坂3作品と同じ石坂洋次郎の小説を映画化した「若い人」(1937年)「青い山脈」(1949年)をも問題とした。芸術のうち、文学を直接は取り扱わなかったが、映画の原作としての小説で考慮した。音楽に関しては、出版文化から放送文化まで、芸術の枠を越えて、しかも文化を拡げて考えることができた。演劇に関しては、教育の目標が、人間的成長であるとすれば、赤穂事件、いわゆる忠臣蔵を扱う中で、人間の条件をも問題にした。

なお、『新明解国語辞典（第6版）』（三省堂、2005年5月）によれば、「芸術」は、次のように記されている。

「一定の素材・様式を使って、社会の現実、理想とその矛盾や、人生の哀歓などを美的表現にまで高めて描き出す人間の活動と、その作品。文学・絵画・彫刻・音楽・演劇など。」

I

2009（平成21）年4月6日、福山大学入学式において、牟田泰三学長は夜釣りの話をしながら、教育の基本について学生に語りかけた。

牟田学長は、釣りが好き。ある夏の夜、釣りに出かける。その夜は、さっぱり釣れず、隣の釣り人二人の話が耳に入ってきた。老年の釣り人と中年の

釣り人の話である。質問は、もっぱら中年の釣り人、答えは、老年の釣り人である。質問の内容は、大潮、小潮、満ち潮、引き潮への疑問であり、答えは、老年の釣り人が月を指して、月と地球で引力の話を説明する。月には、満月もあり、三日月、新月もあるからである。

牟田学長は、物理学者である。観測事実の現場で、相棒が不思議に思う事実に対して、既存の真理、月と地球の引力の理論を説く。しかも、干満の差の大きい瀬戸内の釣り人にとって、大潮、小潮、満ち潮、引き潮は、最も重大な関心事だからである。牟田学長は、話を福山大学に移し、教師と学生の関係を重ね、教師は学生に周辺の不思議なことに興味を抱かせ、学生に質問を出させるような環境を作る。そこで学生はたずね、自ら理由^{わけ}を考え、教師から真理を学ぶことを、教育の基本であると指摘する。

私は、牟田学長の話を聞きながら、以下のようなイメージを描き、翌日、図書館長講話として、新人生に話をした。

まず、牟田学長が物理学者であることを確認し、夜釣りではなく、牟田学長が研究室へ出かけた話として、学長告辞の説明を開始した。牟田学長が、一流の学者であっても、常に研究室で、思ったような成果をあげられるとは限らない。その日は、たまたま成果が得られず、ふと、隣で話をしている二人が気になった。物理学の研究室内の話である故、おのずから物理の話であり、牟田学長が発見に努めた新しい理論ではなかったが、すでに発見され、周知となっている既存の理論の話がなされていたのである。それが、例えば、ニュートンの引力の話であったとしよう。

次に、研究者二人の話の中に、牟田学長は、話し手二人の学問を通しての信頼関係を認め、研究室内という学問を語るに最もふさわしい場所で、既存の理論が検討されている状況に接し、理論が共有され、新たな理論の展開の基礎が確保される様が、まさに教育の原点ではないかと、話されたのである。

最後に、私は、人間文化学部、経済学部、工学部、生命工学部、薬学部の

学生が、会場にいることを念頭において、次のような話で、館長講話を終えた。

夜釣りの話は、船に乗っての瀬戸内の海上での情景として受け取り、真暗な海上の上に、月がこうこうと照っている光景を前提とした話とした。船に乗って夜釣りに出かけるぐらいであるから、二人の信頼関係はまちがいない。美しい自然環境の下で、具体的に真理が説かれたのである。話を福山大学に移した場合、教師と学生との関係には、どちらかからの一方的なものではなく、相互の信頼関係に基づく愛 (love) が必要であり、入学式当日の福山大学の構内全体に咲き誇る桜、美しい自然環境に加え、美しい人間関係の下、即ち美 (beauty) に裏打ちされた構内で、教師が学生に本当の真理 (truth) を説いた場合、真理は、学生の中に深くしみ込み、同時に、それを確認した教師は、新たな真理の発見に挑むことになる。福山大学は、教師、学生、職員が、三位一体であり、美しいキャンパスの中で、教師がなりふりかまわず真理を追求するあまり、美、愛が一般的には失われがちである場合にも、牟田学長が以上の「夜釣りの話」をした意味は、福山大学の学問には、単に真理を追求するだけではなく、美をも考慮に入れ、しかも学問に対する愛は、学生に対する愛、仲間の教職員に対する愛、そして福山大学が存在する地域社会に対する愛まで拡がり、愛に基づく教育がいかに重要であるかを学長告辞は示したのであると解説した。

私は、牟田学長の入学式告辞に触発され、美と愛を芸術と教育に置き換え、両者の関係を考えてみた。映像芸術と言われる映画から開始する。

石坂洋次郎の小説を映画化した「若い人」(1937年)、「青い山脈」(1949年)は、地方の高校の話である。映画は、『日本映画作品全集』〈キネマ旬報社、1973 (昭和48) 年〉に、次のように紹介されている。

「若い人、'37 (東京発声=東宝) ミッション・スクールの女学生・江波恵子 (市川春代) は私生児だった。教師の間崎 (大日方伝) は反抗的な彼女を心配し、女教師・橋本 (夏川静江) は間崎の心理に共感しながら彼と江波の

仲を嫉妬したりする。そして三人の微妙な心理が人々の誤解を生む。石坂洋次郎の小説を八田尚之が脚色し、監督・豊田四郎はこの演出によって第一線におどり出た。原作を十分に消化したとはいえませんが江波の大胆な行動的性格は、当時の若人にとって新鮮で大きな魅力があり、市川春代が好演した。これはその直後の文芸映画流行の先駆となった作である。82分。(滋野辰彦)⁽¹⁾

「青い山脈、前後編、'49（東宝）『朝日新聞』に連載された石坂洋次郎の原作を井手俊郎と今井正が脚色した青春映画。地方の高校を背景に、ピチピチした女教師と女学生に焦点をあてながら、戦後の男女学生のモラルや彼らを取りかこむPTAの活動を、ユーモラスに描いている。ヒロインの女教師は新鮮な思想を持っている半面、青臭い独善も持ちあわせている。しかしこういう欠点を持ちながら自分の周囲を変化させ、古い人々を味方にしてしまう。つまり人間とは愛すべきちっぽけな欠点だらけの人間だと演出の今井正監督は主張している。この作品は大ヒットし、今井もそれまでの低迷した気持ちをふきとばすきっかけとなったといわれている。原節子、（龍崎一郎）、木暮実千代、池部良、杉葉子が好演。その後東宝と日活でも再映画化している。92分、91分。（磯山浩）」⁽²⁾

「若い人」では、教師、間崎・橋本は、同僚であり、間崎・橋本と、江波との関係は、師弟である。江波の感情と橋本の論理の中で、間崎が右往左往することになる。映画は、論理と感情のバランスを追い続ける。愛が、男女の愛を軸に展開される故に、一人ひとりの愛が、結婚を前提とした場合、必ずしも平等ではない。愛が、教育の場で、機能しないのは、一人ひとりの自立が保障されていないからである。したがって、三人の人間関係は、美しい人間関係とはいええない。しかも、人間関係の醜さを説明する論理も、映画には存在しない。

「青い山脈」では、女教師の原節子と校医である龍崎一郎は、同僚ではあっても、教師と校医では、必ずしも立場は同じとはいええない。女子学生の杉

葉子と、男子学生の池部良との男女学生のモラルが、教師と校医の連携によって、周囲の人々の誤解を解き、戦後の独立した男女の関係とは何なのかと問うことになる。恋愛と結婚、田舎と都会とを対比する中で、戦後の民主主義が問われることになる。戦争による暴力が、一応なくなったにしても、校医の教師に対する暴言、二セのラブレター事件に示されるように、話し言葉、書き言葉による暴力が存在している以上、真の平和が到来したことにはならないことが示されるのである。話し言葉、書き言葉による暴力が、一人ひとりの自立のためには、いかに妨げとなるかを、男女のモラルを問う中で、戦後の民主化の意味が説かれるのである。真の男女の愛の実現には、周辺の人々の美しい人間関係の確保が前提となるのである。しかし、映画の中では、周辺の人々の人間関係を美しくする説明の論理を読み取ることはむずかしい。

II

田坂具隆が、石坂洋次郎の小説を石原裕次郎主演で映画化した「乳母車」は、『日本映画作品全集』〈キネマ旬報社、1973年〉に、次のように紹介されている。

「乳母車」

「'56（日活）父（宇野重吉）に愛人（新珠三千代）があり女兒まで出来て本宅に帰らぬことを知った娘ゆみ子（芦川いづみ）が母（山根寿子）に内証で愛人宅を訪れ、その弟の宗雄（石原裕次郎）と知り合う。若い二人は父母と愛人の仲を清算させたいと骨を折る。思い通りには運ばなかったが若い二人は育ちゆく女兒のため力になってやろうと誓い合う。石坂洋次郎原作、沢村勉脚色、田坂具隆監督で若い心を軸にした人生スケッチだが、下手なモラルを強要せず淡々と運んだところが田坂独特の味で殊更に前半がすぐれている。110分。（飯田心美）」⁽³⁾

映画「乳母車」には、女兒がらみで乳母車が3回登場する。1回目は、ゆ

み子が初めて父の愛人宅を訪れた際、宗雄が気をきかせて、女兒を乳母車に乗せて近くの寺の境内に出かけ、乳母車から離れて昼寝をしてしまう。2回目は、宗雄が姉に会いに姉宅に出向き、生垣添いまで来た途端、生垣内には、たまたま、ゆみ子の父が女兒を乳母車に乗せて、いかにも幸せそうな生垣内の情景に遭遇する。3回目は、宗雄とゆみ子が、ゆみ子の父と宗雄の姉が愛人関係を清算した後、女兒の行く末を思い悩み心配している時、赤ちゃんコンクールの会場前をたまたま乳母車に女兒を乗せて通りかかり、行きがかりから、女兒を自分達の子供として、コンクールに出場させる。そして、二人が入賞し、獲得した賞品が、ピカピカの乳母車であった。

1回目では、ゆみ子が宗雄を捜しに出かけ、寺の境内で、いかにも気持ち良さそうに昼寝をしている宗雄をしり目に、ゆみ子が女兒を連れ去り、宗雄を大あわてさせる。

2回目では、宗雄は、生垣を越えた紙風船を手にし、生垣越しに返すが、幸せそうな生垣内の親子三人を思い、宗雄は引き返すことになる。

3回目では、赤ちゃんコンクールで表彰された宗雄とゆみ子二人の、いかにも晴れ晴れとした幸せそうな姿を写し、映画は終わっている。

ゆみ子が、女兒を連れ出したのは、宗雄と女兒の関係は叔父と姪に対し、ゆみ子と女兒の関係は、姉と妹だからである。ゆみ子が宗雄になぜ連れ出したかわからないと答える理由である。宗雄が、遭遇するゆみ子の父と宗雄の姉との関係の中での女兒は、親子であることには間違いないが、社会的モラルにおいては、必ずしも認められるものではない。ゆみ子の両親は、愛人騒動の中で別居することになり、女兒の引き受け手のひとつが消え、母子で生活する方法も経済的關係をも含め、難しいということになれば、第3の道が模索される。宗雄とゆみ子がお互いに好き合っていれば、二人が結婚し、二人の娘として女兒を育てる方法の可能性を示唆している。

田坂具隆が、石坂洋次郎の小説を同じ石原裕次郎主演で映画化した「陽の

あたる坂道」は、『日本映画作品全集』〈キネマ旬報社、1973年〉に、次のように紹介されている。

「陽のあたる坂道」

「'58（日活）上流家庭の次男として育てられた石原裕次郎は、ふとしたことから自分は父が芸者に生ませた子と知る。彼は異母妹の芦川いづみの家庭教師である女子大生の北原三枝の話から、北原と同じアパートに芸者をやめた実母が裕次郎の次に出来た子・川地民夫とくらしているのを知り母子に近づく。川地は芦川と親しくなるが裕次郎も北原と愛し合うようになり、やがて若い彼らに明るい未来が待つ。石坂洋次郎の青春小説を田坂具隆が池田一朗と共同脚色、みずから演出した作品で、裕次郎に自由奔放さとヒネクレ味の性格を与え新鮮に扱ったところが好感を残した。190分。（飯田心美）」⁽⁴⁾

「陽のあたる坂道」は、話し合いとなぐり合いの物語である。石坂洋次郎の小説が映画化され、小説の特徴である話し言葉、書き言葉に、映画俳優のアクションを加えることによって、原作である小説に厚みを与えている。その意味において、飯田心美の人物紹介が、小説の登場人物名ではなく、俳優名で示されていると理解すれば、前作「乳母車」から、田坂具隆の世界が広がったことになる。

話し合いの場面が3回登場する。石原裕次郎がらみであり、石原裕次郎が家庭の中において特別の地位にあることからきている。1回目は、父との話し合いであり、話し合いにおいて、父は冷静に対応できず、感情的とならざるをえない。2回目は、母との対話であり、両者の話し合いは、たんたんとおこなわれる。3回目は、兄、小高雄二との話し合いとなり、話し合いは、こじれ、裕次郎の兄への殴打で終わる。

なぐり合いの場面も、3回ある。1番激しいなぐり合いは、弟、川地民夫とのなぐり合いであり、すさまじいまでの情景を呈する。次は、妹の家庭教師、北原三枝の裕次郎への平手打ちであり、最後が、前述した兄、小高雄二への

裕次郎の殴打である。

話し合いは、1回目が、裕次郎の実の父とであり、2回目は、義母との、3回目が、血を分けた兄とのものである。

なぐり合いは、1回目が、血を分けてはいるが、一緒に生活していない兄弟同士、2回目は、兄の恋人が、兄と弟を比較する中で、弟と自分との距離の近さを確認した平手打ち、3回目が、血を分けた兄であり、一緒に生活しているものの、本能的に自分の位置を感じ取り、弟の一步下がった兄弟関係が、兄との関係の中でさまざまな事件に遭遇し、その結果、本当の兄弟としての対応を示せた裕次郎の殴打なのである。

話し合いとなぐり合いが、一体となって、家庭の円満、裕次郎と北原三枝、川地民夫と芦川いづみの明るい未来が示されるのである。なお、石原裕次郎は、画家を志し、兄は医者、川地民夫は歌手で満足せず作曲家を目指している。

田坂具隆が、石坂洋次郎の小説を、同じ石原裕次郎主演で映画化した第3作「若い川の流れ」は、『日本映画作品全集』〈キネマ旬報社、1973年〉に、次のように紹介されている。

「若い川の流れ」

「'59（日活）石坂洋次郎の原作を田坂具隆と池田一朗が脚色、田坂が演出。サラリーマンの石原裕次郎は専務のめがねにかなない娘の芦川いづみの婿に望まれる。だが芦川にはすでに好きな青年・小高雄二があり、裕次郎にも彼を慕う同じ職場の北原三枝がいたことがわかり、彼らは自己の道を自分の手でひらいてゆく。石坂文学おなじみの青春物語だがプロットに新しさが乏しく前作『陽のあたる坂道』に劣る。撮影・伊佐山三郎。127分。（飯田心美）。」⁽⁵⁾

「若い川の流れ」は、世代間の交流を通して、古い人間関係から新しい人間関係への転換を描いている。その意味で、水の流れにアレンジメントされた花束が、浮かんでいる場面が各所に挿入されていることは象徴的である。

古い上司（専務・千田是也）と部下（石原裕次郎）の関係が、職場の一般

的な関係の中で、上司の妻（専務の妻・山根寿子）が、上司と部下（北原三枝）の関係に言及し、古い家族関係（石原裕次郎の家庭）の中での妻と夫との関係から、妻が一步抜け出し、母親（裕次郎の母・轟夕紀子）として息子（石原裕次郎）に新しい夫婦関係を示唆する。

古い上司が、専務であり、古い上司が言うままに行動するのが部下、石原裕次郎である。上司の妻とは、前記専務の妻であり、夫の部下（北原三枝）に男と女の関係の危険を説いて聞かせるのである。古い家族関係とは、石原裕次郎の家族を指し、田舎から上京してきた裕次郎の両親が、裕次郎が気づかない北原三枝の裕次郎への思いを伝え、結婚を古い夫婦関係を前提にしていた息子に、考えるヒントを与え、新しい夫婦関係とは何かを問うて、映画は終わる。

水に浮かんだアレンジメントされた花束が、円滑に流れるかどうか、芦川いづみと小高雄二との関係に、石原裕次郎と北原三枝との関係を対比することによって示される。芦川、小高の関係が、どこか不安が残るのに対し、石原裕次郎と北原三枝の関係が、裕次郎が実母との関係を尊重し、三枝が上司の妻の意見を謙虚に聞くことによって、古い世代と新しい世代の交流が、新しい川の流れとして出現し、大河となって海に注ぐ可能性を示すのである。この種の映画として、映画を見ているうちに感じる長さは、新しい川の流れが曲がりくねって長いと理解すれば、必ずしも、「プロットに新しさが乏しく、前作に劣る」とは判断しかねる。

III

2009（平成21）年4月6日、福山大学入学式において、牟田泰三学長の告辞に引き続き、宮地尚福山大学総長・理事長の挨拶は、世界の中における日本の位置と、日本の中における福山大学の役割を強調するものである。

宮地尚総長・理事長は、金融論研究者の一人として、サブプライム問題を

きっかけに発生したアメリカ発の金融不安の話をまじえながら、21世紀はアメリカと中国が相対峙し、文明の衝突が危惧される時代との考えを紹介する。

私は、宮地総長・理事長の話を聞きながら、次のような感想をもった。

私は、文明とは、前記したように一般的に政治、経済、軍事、技術、文化で理解し、文明の衝突とは、以上あげた項目での競い合いの結果生じるものだと判断した。総長・理事長の話では、具体的にアメリカと中国との衝突が出されたが、アメリカは、西欧文明、中国は東洋文明を示すものと解釈した。総長・理事長では、日本の位置を危惧された話のように聞こえたが、別の見方からすれば、大国アメリカと中国に対し、小国日本が、世界の中においてどのような位置を占めなければならないか、との問いかけであるととった。総長・理事長が、教学に加え、経営の責任者であることを考慮に入れた場合、文明の競い合いの中心に、軍事がおかれているはずはなく、文化（精神文化）といわれる学術、芸術、宗教、教育、出版等をおいていると思わざるをえない。大学は、学術基盤の中心でなければならないからである。

宮地総長・理事長は、学生に、緑に包まれた静かな環境の中で、目的意識を持ち、充実した学園生活を送ることを求めた。

福山大学は、人間文化学部、経済学部、工学部、生命工学部、薬学部を擁しているものの、広島県東部の隣接する尾道市立尾道大学のように、芸術関連学部は存在しない。総長・理事長として、その欠を十分認識した上で、美しいキャンパス、美しい人間関係を、学生に約束し、学術（真理）、芸術（美）、教育（愛）を三位一体として考えていることを述べたと理解した。世界の中における日本の位置は、軍事大国を目指すのではなく、文化に裏付けられた政治、経済、技術で競い合い、勝利することであると説いたのである。

宮地尚総長・理事長は、東洋哲学の教え「学問は人間を変えるといひます。本当の学問というものは、血となって身体中を循環し、人体、人格をつくる。したがってそれを怠れば自ら面相・言葉も卑しくなる。」をあげ、日本の中

における福山大学の果たさなければならない役割を示した。

J.M.ケインズは、人間学としての経済学（モラルエコノミクス）に必要な条件として、真理、美、愛をあげている。学問が、人間を変え、面相・言葉を高貴にするためには、学術（真理）、教育（愛）に加え、美に対する具体的な取り組みを必要とするのである。美が、芸術と結びつく概念であるとすれば、教育と文学、美術、音楽、演劇などとの関係である。

私は、『福山大学図書館報第6号』（2008年9月）に、「レスピーギ、交響詩『ローマの松』—音と活字—」として、次のような文を書いた。

「イタリアの作曲家、オットリーノ・レスピーギ（1879～1936年）には、交響詩『ローマの噴水』（1916年）、『ローマの松』（1924年）、『ローマの祭り』（1928年）の『ローマ3部作』がある。とりわけ『ローマの松』は、有名である。

『ローマの松』は、『ボルゲーゼ荘の松』、『カタコンベ付近の松』、『ジャンニコロの松』、『アッピア街道の松』の4曲から構成されている。

第45回レコード・アカデミー賞を管弦楽曲部門で受賞した、アントニオ・パッパーノ指揮、ローマ・サンタチェチーリア国立アカデミー管弦楽団『レスピーギ、ローマ3部作』での佐伯茂樹氏の解説によりながら『ローマの松』を紹介すれば、次の通りである。

第1曲『ボルゲーゼ荘の松』では、有名な公園ボルゲーゼ荘の松の下で遊ぶ子供たちが描かれ、第2曲『カタコンベ付近の松』では、カタコンベ（地下の墓場）の入口に立つ松が、第3曲『ジャンニコロの松』では、ローマの街並が一望できるジャンニコロの丘の松、第4曲『アッピア街道の松』では、古代ローマで、ローマと各地を結びつける主要道であったアッピア街道の松が描かれている。

NHK-FM放送で実況中継された『第1630回N響定期演奏会（2008年10月29日）』でジャンンドレア・ノセダ指揮NHK交響楽団が演奏したラフマ

ニノフ作曲、レスピーギ編曲『5つの練習曲、音の絵』は、『海とかもめ』、『市場の風景』、『葬送行進曲』、『赤ずきんと狼』、『行進曲』から構成されている。

レスピーギは、『ローマの松』で真昼のローマ、夕闇のローマ、真夜中のローマ、夜明けのローマを、子供たち、死者たち、寝静まった街並み、軍隊の行進と結びつけて、松を描いている。一方、ラフマニノフ『音の絵』の編曲では、レスピーギは、静かな海上で自由に飛び交うかもめ、市場の喧噪で掻き消されるかもめの鳴き声、かもめの死、そして、狼に追われる赤ずきんちゃん、狼から逃げおおせ、自分のリズムを取り戻した赤ずきんちゃんを描いていると言える。かもめと人間赤ずきんちゃんを対比することによって、レスピーギの本来の世界が、ラフマニノフに追いつけられ、自分の世界を見失いかけるものの、編曲を完成し、自由を取り戻し、安堵したレスピーギ自身を描いているとも言える。

音の世界を活字の世界に置き換えることによって、一つの世界が見えてきたような気がする。」

以上の文章が、経済学研究者の一人である私に書けたのは、文化の一翼を担う出版文化、放送文化に負っている。

出版文化に関して言えば、NHK-FM放送でN響定期演奏会の実況中継を耳にすることができたこと、FM番組情報誌『FM・CLUB』の存在は、切っても切れないものである。『新編、音楽中辞典』（音楽之友社、2002年3月）を手元に置いて、前記、レスピーギとラフマニノフの関係を知り、レスピーギの他の作品「リュートのための古いアリアと舞曲」、「ブラジルの印象」を聞いたのも、同誌のおかげである。しかも、「リュートのための古いアリアと舞曲」は、全3集で、いずれも4曲からなるが、第1組曲(1917年)、第3組曲(1931年)が放送されたのは、2009年2月2日であり、第2組曲(1923年)が放送されたのは2009年5月25日である。レスピーギの組曲、

全3集が聞けたのは、同誌の情報提供によるが、第1、第3組曲放送後、第2組曲を放送したNHKに対しても敬意を表するものである。出版文化と放送文化が一体となった具体例である。

レスピーギの「リュートのための古いアリアと舞曲」は、前記音楽辞典によれば「16、17世紀のいろいろな作曲家によるリュート曲を選んで、近代ふう^にに編曲したもの」とある。私の図書館報への文章での、レスピーギを「ローマ3部作」の作者としてだけでなく、ラフマニノフ「音の絵」の編曲への言及は、編曲の名手としてレスピーギを発掘する役目を果たしたのではないかと思う。

IV

2008年12月14日、私の教え子である50代で企業人として活躍中のK君とM君と共に、大阪サンケイホールブリーゼ^{こけら}柿落とし公演「冬の絵空」の観劇に出かけた。私は、終演後、K君に感想文の提出を求めた。私も、独自に次のような文章を書き、K君の努力に報いた。

冬の絵空（作、小松純也、演出・上演台本、鈴木勝秀）について

「演劇『冬の絵空』は、元禄時代、将軍、徳川綱吉の治世、赤穂事件を扱っている。主要登場人物は、歌舞伎役者、沢村末十郎、赤穂藩士、大石内蔵助、赤穂藩主、浅野内匠頭長矩、高家、吉良上野介、豪商、天野屋利兵衛、その娘、おかる、堀部安兵衛とその妻、お順である。

絵空事とは、浅野内匠頭は、天野屋利兵衛の下で生存しており、切腹したのは、影武者であるとされている。天野屋利兵衛の下には、シロという犬男（犬人）がおり、隠れ切支丹の仮の姿である。死んだはずの内匠頭の生存、人でもない犬でもない犬男（犬人）の存在は、絵空事なのである。

物語は、この世とあの世の話である。この世からあの世への途には、渡らなければならない三途の川が存在している。この世から、あの世へ行けるのは、

本物の人でなければならない。本物の人^{ひと}の条件は、真の愛を会得した人間である。男と女、男と男、男でもなく女でもない（犬人）と女^{ひと}の関係の中で得られたものである。沢村宋十郎とおかる、吉良上野介と清水一学（用人）、シロとおかるの関係が軸になる。愛のために死ぬるのか、その愛は、本当の愛なのかを、終始問うているのである。沢村宋十郎は、おかるのために、死を選び、おかるは、宋十郎の行為によって真の愛に目覚め、先に死んだ宋十郎の迎えがあり、三途の川を渡ることができるのである。

赤穂藩士、大石内蔵助は、吉良上野介の幕府への仲介で、赤穂事件を平和裡に解決させようとする。他方、堀部安兵衛を中心にした赤穂藩士は、あくまでも上野介の首を求めるのである。豪商、天野屋利兵衛は、吉良邸討ち入りを望むのであるが、内蔵助が応じないために、宋十郎を使って実現に努めるのである。宋十郎は、江戸市中で内蔵助を演じ、おかるを嫁にしたいという一念から、利兵衛の言うがままに、江戸での赤穂藩士の評判を高め、その役割を果たすことになる。

赤穂藩主、浅野内匠頭は、大石の考えを支持し、赤穂事件の平和裡解決を認めることになる。堀部安兵衛を中心にした赤穂藩士は、内匠頭、内蔵助を切り捨てる。藩主、内匠頭は、影武者が田吾作であったことを理由に、田吾作の匂いがすると切り捨て、内蔵助から離反するのは、内蔵助を演じる宋十郎を、宋十郎の行動によって内蔵助と認めることによってである。宋十郎が、役者であるが故に、姿、形は仮面をつけることによって、内蔵助を演じることができるからである。堀部一味が大石と仰ぐ人物は、自分達の考えを実現する人物でなければならないのである。人を人として認めようとする場合、人間の五官（目、耳、鼻、舌、皮膚）ほど当てにならないことが、姿（形）、声（^{こゑ}声音）、田吾作の匂い、赤穂藩士であるかどうかのためされる瀬戸内のタコの味、おかるが触れたはずの宋十郎の手の感触、すなわち五感で示されるのである。五官が当てにならないということになれば、脳みそ、心臓が、

問題になる。知と愛であり、時代的背景を考慮に入れば、知は武士道、愛は忠義、となる。武士道が頭で考えられている以上、観念的であり、行動と結びつかず、頼りにできないとすれば、頼るは、忠義の実行、しかも本物の愛としての忠義なのである。おかるが、犬男頭に目が見えるか見えないかを問われ、宋十郎への本物の愛が見えた瞬間に、三途の川を渡ることができるのである。

物語は、老尼が三途の川にさしかかり、犬男達に囲まれ、犬男頭に、目が見えているのに目が見えていないふりをしているのではないかと問いただされ、老尼が自分の一生を語るころから始まる。老尼は、おかるであり、おかるを通じて、物語の全体が語られることになる。

犬頭は、大石内蔵助の、犬男達は、赤穂藩士の成れの果てなのである。内蔵助は、上野介をおどし、幕府への仲介を頼み、赤穂事件の平和裡の解決に成功する。しかも、大石は成功によって、仕官することになり、おかるを嫁にする。おかるは、大石が好きになるのだが、実は宋十郎が演じる大石を大石だと、信じ込んでのことである。大石のおかるへの愛は、本物の愛ではなく、結果的に内蔵助はおかるをもて遊んだことになる。それ故、大石は犬頭ではあっても、犬でもなく、人でもない犬男として三途の川は渡れないのである。他方、赤穂藩士が犬男であるのは、忠義という名で討ち入りを果たすが、主君を斬殺しての成果であり、本物の忠義、本物の愛を体現したとはいえないからである。

天野屋利兵衛は、自分の目論見通り事が運ばず、屋敷に火を放ち、最期をとげる。犬男シロは、おかるが大石と結びついたことに逆上し、大石に切りかかるが、大石に討ち果たされてしまう。

犬でもない、人でもない犬男の存在は、綱吉の時代の生類憐みの令が背景にある。本物の人でなくても、犬と同類として、この世には存在できるが、本物の人、本物の愛が理解、実践できる本物の人^{ひと}しか、あの世へは行けない

のである。おかるが、宋十郎を見初めたのは、宋十郎が^{わごと}和事（心中物）を演じ、江戸中の人気を集めた時であり、内蔵助を愛することになったのは、宋十郎の演じる^{じつごと}実事（討ち入り）に魅了されたからである。

吉良上野介、シロの愛は、一方的な愛であり、本物の愛とはいえない。劇では、堀部とその妻お順との関係も描かれるが、武闘派安兵衛に字の手ほどきをする師弟の関係としてであり、本題の男の世界への介入は、お順には一切許されない。そういう意味で堀部夫妻に、真の夫婦の愛を見出すことはむずかしい。忠義のために死ねない内蔵助と、愛のために死んだ宋十郎、宋十郎の中に、作者は本物の愛、清純で理想的な愛を認めたのである。

別の見方で整理すれば、次のようにもいえる。経済学者、ケインズがいう人間に必要な条件、真、美、愛に沿って考えてみた場合である。真とは真理の追求、学術のことであり、この時代、儒学を指す。美とは美の創造と享受、この場合、美は忠義を尽す行為であり、美の創造は、赤穂浪士の討ち入り、美の享受は、討ち入りに拍手喝采する江戸市民、となる。愛は愛の発揮、縦の愛、心の内面も含めた忠義、すなわち主君にひたすら仕え、その結果討ち入りを実現することである。この時代、男女の愛は、愛の中心ではない。ましてや、男と男、犬人と女等の愛は問題にならない。その結果が、愛は、武士道に基づく忠義の発揮であり、愛は、死によってしか示されない。武士でもない歌舞伎役者宋十郎の死は、おかるへの愛のためであり、縦の愛、忠義の愛から一歩抜け出しているのではあるが。

人間の愛が本物の愛であるとすれば、人間の生が全面にあり、死は表に出ないはずである。死を強調し、本物の愛とは何かと問うたにしても、本物の愛はわからない。作品の背景である時代の欠陥なのか、時代を支配した学問の欠陥なのか、再度問うてみる必要がある。」

おわりに

本文に付記を加えて、結びとしたい。

牟田泰三福山大学学長、平成21年度入学式告辞は、『福山大学学报、120号』（2009年4月6日）に掲載されている。宮地尚福山大学総長・理事長、平成21年度入学式挨拶は、ご本人から原稿を入手し手元にある。

芸術の一部である美術、絵画・彫刻については、「美術館連絡協議会25周年記念、日本の美術館名品展」が、東京都美術館（2009年4月25日～7月5日）で、開催されている。ふくやま美術館からは、ジョヴァンニ・セガンティーニ「婦人像」とウンベルト・ボッチョーニ「カフェの男の習作」が、いずれもイタリアの作品が出品されている。また、奈良国立博物館（2009年4月4日～5月24日）では、「唐招提寺金堂平成大修理記念、国宝・鑑真和上展」が開催されている。

前記「名品展」に出品されているジョアン・ミロ「ゴシック聖堂でオルガン演奏を聞いている踊り子」（福岡市美術館蔵）を見たが、話し言葉、書き言葉で説明することは、難しかった。「和上展」の目玉、「国宝・鑑真和上座像」が、唐招提寺を出て、奈良国立博物館に移された今回、和上像が、第一級の肖像彫刻であるかどうかは、私には判断しかねた。本稿では、問題にできなかった文化の内、芸術と宗教との関係で、理解しなければならないのかとの思いもした。

芸術の一部である文学と映画の関係においても、映画化された石坂洋次郎の小説のすべてを取り上げてはいない。田坂具隆の映画に関しては、石坂洋次郎作品、全3作を問題にしたが、「若い人」、「青い山脈」については、「キネマ旬報ベスト・テン」入選作品に限定し、豊田四郎（1937年、6位）、今井正（1949年、2位）作品を扱った。石坂洋次郎の小説を、田坂具隆以後に映画化した吉田喜重の作品「水で書かれた物語」（1965年、10位）は、『日本映画作品全集』〈キネマ旬報社、1973年〉に、次のように紹介されている。

「'65（中日映画社＝日活）地方の小都市を舞台にした母子相姦の物語（石坂洋次郎原作）を素材に、日本的な家と性における人間関係を抽象化する作業に成功した作品。吉田喜重は、この独立プロ第1回作品で固有の方向と手法をより意識的に、はっきりとうち出した。脚本（石堂淑朗、高良留美子）とともに、高質で透明な映像（撮影・鈴木達夫）のすぐれた協力は見逃せない。セックス映画流行のなかで、母子相姦はここでは暗い背徳と官能の魅惑としてではなく、いわば日本的な父なるものに対し、母なるものとの結びつきによって反逆しようとする行為として、描かれている。出演は岡田茉莉子、山形勲、入川保則、浅丘ルリ子。音楽・一柳慧。120分。（矢島翠）」⁽⁶⁾

映画「水で書かれた物語」は、若い主人公男女二人が、解放され、自由になるのは、母親・父親の死、地方の小都市からの脱出、即ち血縁、地縁から、さらに、男の主人公が勤め先に辞表を出し、職縁から解放されたからと一応の説明はできるが、吉田作品には文学では文字でしか書けないものが存在するように、映像でしか表現できないものがあるような気がする。本映画は、映画芸術として、独立して理解し、監督吉田喜重の映画芸術として展開しなければならないのかもしれない。

他方、石坂洋次郎の小説を映画化した田坂具隆の3作品は、映画俳優、石原裕次郎が全作品に登場している。デビューしたての石原裕次郎が、名匠田坂具隆監督の下で、俳優として鍛えられ、田坂映画で後の大スターに成長して行く基盤を確立したと理解すれば、本稿のテーマ、芸術と教育で、田坂映画を整理できたことと無関係ではないような気がする。そのことは、映画論に、監督中心の見方から、俳優中心の見方への可能性をも示し、芸術論としての映画論のさらなる展開を約束するものなのかもしれない。

(注)

- (1) 『日本映画作品全集 — キネマ旬報、増刊11・20号』 (キネマ旬報社、1973年)、272ページ。なお、本論文において、一部追加したものである。
- (2) 前掲書、23～24ページ。
- (3) 前掲書、45ページ。
- (4) 前掲書、223ページ。
- (5) 前掲書、272ページ。
- (6) 前掲書、243ページ。